

胡堂賞

食卓は待っている

松本大学 1年 朝倉 実唯菜

一見すれば崩壊している家族を題材にしたのが、瀬尾まいこさんが書いた短編小説、「幸福な食卓」。私はこのタイトルを書店で目にした時、家族の笑顔が沢山溢れるような食卓での出来事や思い出を通して、元氣や勇氣を貰えるのではないかと期待を込めて手に取った。でも正直、その期待は見事に裏切られた。ただ、家族の存在とは何なのかという漠然とした問いと真っ向に向き合い、元氣とか勇氣とかそれ以上の感情である、生きる希望を与えて貰ったと思う。

主人公は、受験生と思春期が重なる中学三年生の中原佐和子。物語は、高校の教師である父が「父親をやめる」と宣言する、朝食の場面から始まる。父から何とも不思議な発言が飛び出したのには、それぞれがそれぞれに遠慮し、打ち明けられない過去を持っている事が関係していた。一度自殺未遂をしているのが父。その事件を境に別居を始めて、家を出た後の方が生き生きとしているが、家族の事は本当に愛している母。元天才児ながらも大学を中退し、農業を営む兄。そして、父の事件が起こった梅雨に決まって体調を崩す佐和子。いわゆる普通の家族とはいえないが、この家族なりに幸せに過ごして、彼女達は食卓の場を通して「家族」として繋がっていた。

複雑な家族の形に悩みながらも日々を送る佐和子だったが、ある大きな出会いが佐和子を励ます。とても単純で素直な大浦君という男の子だ。その優しさは佐和子の心の拠り所となった。次第に二人は通じ合い、付き合い始めるのだが、二人を悲劇が襲う事となる。

クリスマスイブの朝、佐和子にプレゼントを買おうとアルバイトを始め、自転車で新聞配達をする大浦君に、佐和子は窓から声をかけた。だが、この幸せがプツンと切れるかのように、彼はその後交通事故に遭い、亡くなってしまう。それでも、この辛くも切ない出来事が、皮肉ではありながらも中原家をまた繋がり合わせ、再生の道へと導いていく。

「もっと家族に甘えたらいいのって思うよ。家族はつくるのは大変だけど、

めったになくならないからさ。」

大浦君の死を受け取める事が出来ず、一日のほとんどもを泣いたり眠ったりして過ごす佐和子に対して、兄の彼女のヨシコがかけた言葉だ。この言葉が佐和子の心に真っ直ぐに届き、再び自分の人生を歩み出せたように、読者の私の心にも深く刺さった。彼女は少し雑な性格で、無茶苦茶な励まし方にも聞こえるが、家族という繋がりの本当の意味を、シンプルに教えてくれている言葉だと感じたからである。確かに、家族はとても難しい存在だと思う。考えが合わないと思っても、血の繋がりは強い物であり、作る事は勿論、離れる事も難しい。その存在は支えになってくれると思いきや、時に縛りになる事だってある。家族で囲む食卓の場も、そのうちの一つだと思う。どんなに辛い体験をしても、家族の存在と毎日の食卓は淡々と続いていく。佐和子は悲しみからそれが煩わしい存在になっている事もあるが、その存在があったからこそ、佐和子の悲しみは家族に届いていたのだ。

私は、支えてくれる家族や周りの存在を大切にできているだろうか。佐和子のように真面目なのに、その反動で心配させる状況を作ってしまったっている摂食障害という精神疾患の中の拒食症で、特にストレスが要因となって食べる事を拒む病気である。この病気の治療で難しいのは、食べられない事実だけを治そうとしても上手くはいかないところだ。「ありのままの自分を周囲が認めてくれる」、そんな勇気づけられる体験と、食べる事の重要性を再確認する事が大切になる。

佐和子の状況も、重なる部分があるのではないかと私は思った。それでも、佐和子を辛さから支えてくれたきっかけとは何か。それは、皮はかすかすで、卵の殻も入り混じったヨシコのシュークリーム。決してパティシエが作った最高に美味しい物ではないが、そこには、佐和子を勇気づける愛と栄養が、溢れるほどのクリームと共に詰まっていた。それに加え、食卓には、佐和子をずっと待ち続ける家族の存在があった。私の場合も、家族との食卓の場を通して、すぐに病気への変化に気付いてもらえた。家族という理由だけで守ってくれる、存在の偉大さを痛感した。

家族の存在は近過ぎるからこそ複雑で、心が通い合えない事もある。しかし、いつの日も味方でいてくれる。また時には、思ってもみなかった人がサ

ボートとなり、救い出してくれる事もある。元気や勇氣は、既にそこにある
かけがえのない存在が与えてくれているとこの物語は私に教えてくれた。
昨今の難しい社会情勢を背景に、個食になってしまふ家庭が増加している
そうだが、家族で囲む食卓のささやかな喜びを、毎日噛みしめながら向き合
っていききたいと思う。

図書名 幸福な食卓
著者名 瀬尾 まいこ

審査員講評

胡堂賞感想文について

少子高齢化が進む日本社会において、「家族」
や「食卓」のあり方が以前と比べて変化している
ことを実感します。佐和子を取り巻く家族の姿に
自身の経験を重ね合わせ、「食卓は待っている」
というタイトルの下、日々の幸せをじっくりとか
みしめている作品です。

「家族で囲む食卓のささやかな喜びを、毎日が
みしめながら向き合っていきたいと思う。」と結
んでいる本作品を審査した後、無性に家族で食卓
を囲みたくくなりました。

教育長賞

アフガニスタンの女性作家たち

加藤 雄三

新聞に片隅の広告で紹介されていた本である。副題に「アフガニスタンの女性作家たち」とあり、その言葉に魅かれて書店に注文した。アフガニスタンといえば世界で一番貧しい国であり、頻繁にテロが起きる政情不安な国、タリバン政権により女性の教育の場が失われている国。その固定概念が染みついていて、それだけに最貧国のアフガニスタンでは女性の立場は一番弱く、何の権利も補償されていないのに、文学を創り上げる土壌があるのかと疑問にさえ抱いてしまう。手にしたもの、もしかしてタリバンが政権を握った後、裕福だった家族が亡命し、在りし日の美しいアフガニスタンを追想しながらペンをとった小説集なのではと、穿った目で見てしまったほどだ。私の貧しい心は、アフガニスタンと文学は結びつかなかったし、さらに女性がペンを取ることはありえないと決めつけていた。

その慢心が脆くも崩れたのである。この本には二三編の短編が組まれていて、どの作品もアフガニスタンで女性として生きることはどういうことを示し、安直な幸せの結末はない。なぜ人間は小説を書かなければならないかと、文学を創り出すための根源的な意味までも問いてくる。

男尊女卑が社会通念となった国で八番目の娘として生まれたことは何を意味するのか、職場でセクハラされても不当に解雇される女性は何を思うか、昼も夜もロケット弾が撃ち込まれる町に住む生活は、暴力が絶えない家庭で生まれた子どもと女性はその不条理とどう戦うか等々。どれもアフガニスタンの日常で起こっている出来事を綴っており、出口も希望もみえない国情を反映している。どの小説もルポルターージュに思えるほどだ。

へ彼女を見ると、女性たちがなぜスィヤーフ・サルと呼ばれているのか納得できる。彼女はその真の言葉の意味を体現している。闇を運命づけられた者、という意味を。『ダーウードのD』

へ壁には古い文字があった。「新たな井戸を掘れ」と。そうだ、アフガンの女生徒たち全員の夢を収めることができるほど深い井戸を掘るのだ。人々は、子どもたちの血に塗れた持ち物や身体の一部を集めていた。『花』

このような一節に出会くと、アフガニスタンで女性として生きる意味と私
が住む平穏な国との違いに、大きく心が揺さぶられ眩暈すら起こす。そして
果てのない無力感に取り憑かれる。わたしが新聞やニュースで知っているア
フガニスタンは、表層的なものでしかなく、そこに住む人々の悲哀や苦悩に
ついて何も知らないことに。本を読むことでしか知り得ない無力感に。ただ
文学の力が国境を越えて、接点の無き人の心を揺り動かしたのは紛れもない
事実だ。その文学の力は、アフガニスタンの女性たちが小説という方法で、
自分たちが置かれた状況や不条理を白日に晒し、躊躇することなくすべてを
書き切ったことで、知り得ることができた。

あとがきには、この本が出版された経緯が綴られている。タリバン政権前
に「ライト・アフガニスタン」というプロジェクトで進行していたものの、
タリバンが国を統治すると、女性の教育の場は失われ、家庭に入ることを強
要され状況が一変する。女性が小説を書くとなれば、それは逮捕され同時に
死を意味することになる。この本の女性たちは国内で出版される機会はない
と理解しつつも、自分の思いや憤りをかたちにすべく、人目を忍んでペンを
取り「ライト・アフガニスタン」のスタッフに作品を託した。それゆえに個
人が特定できないように作家紹介はない。そして参加した作家は「わたした
ちにできることは、精神的な支援をし合うことだけです。作品を読んでもら
うことは、精神的な支援なのです。戦争であってもわたしたちの創造する力
を奪い取ることはできません」という言葉を残している。その言葉に文
学の力は、何者にも屈しない強靱な精神力が根底にあって、作品を生み出す
ことで同じ境遇にいる人々の心の支えとなり、アフガニスタンが抱えている
問題を他国の人々に伝えることにあると考えると考えずにいられない。

残念ながら経済的に裕福な国に住んでいると、文学の力は忘れられて、売
れるか売れないかで価値が決められてしまい、人々が眼を背けなくなるよう
な現実を描いた本は、忌避される傾向にある。アフガニスタンの女性たちが
命の危険を顧みず、この現実を世界の人々に知ってもらいたいと意を決しペ
ンを握った状況とは、雲泥の差がある。どちらの状況が文学にとって幸せな
のかは問わない。ただアフガニスタンの女性たちのほうが、文学の力を心の
底から信じている。読後は放心状態であったのは言うまでもない。

図書名
著者名

わたしのペンは鳥の翼
アフガニスタンの女性作家たち

優秀賞

自分に合う夢の叶え方

紫波総合高等学校 3年 高橋 美咲

私がこの本を選んだ理由は、「夢の叶え方はひとつじゃない」というタイトルに興味を惹かれたからだ。私は今、高校三年次ということで、学校でも家庭でも常に進路のことについて考えながら生活することが増えている。しかし、自分の進路について悩みを抱えることが多く、未来の自分は夢を叶えられているのかどうか、時々不安に思う時がある。そんな私にとってこの本は、将来に希望を持たせてくれるきっかけになった一冊だ。

この本は、著者である岡嶋さんが「音楽で生きていく」という夢を叶えるまでの歩みが書かれている。岡嶋さんは中学時代に「音楽をやりたい気持ちが決まっているのに、高校に行く意味が果たしてあるのだろうか」と、高校に進学することに疑問を持ち、同じ学年の生徒達が「当たり前」のように高校に進学する中で、自分だけ音楽スクールへ通うことを決断した。そして、路上ライブやCDショップでのアルバイト、仮歌の仕事など音楽に関する仕事を「音楽で食べていける」ようになるまでひたすら続けた。

私は岡嶋さんの生き方で、「音楽で生きていく」という夢をずっと変えずに持ち続けていたことに驚いた。私は今まで、ペットショップの店員や漫画編集者など、ジャンルを問わずに様々な夢を持ってきた。影響を受けやすく、頻繁に将来の夢が変化していった。今の夢は、建築士になって、将来自分が住む家を設計することだ。この夢はつい一、二年前に持ち始めた夢だ。その前までは、建築とは全く異なる職種に興味を持っていた。

私と岡嶋さんを比較して、明らかな違いがあることに気づいた。それは、昔から変わらずに同じ夢を持ち続けている、という岡嶋さんの夢への覚悟や気持ちの大きさだ。しかし私のように将来の夢が頻繁に変わるということは決して悪いことではないと思う。多くの仕事に興味を持つことで様々な可能性の中から本当に自分が目指したいものを見つけることができる。その中から、将来の自分が後悔しないものを選ぶことが大事だと思う。岡嶋さんが同じ夢を一途に追い求めることが出来たのは、本当に「音楽」というものが好

きでその好きなことを仕事にしたい、という思いが強かったのだろう。

岡嶋さんはこの本を通じて、夢の叶え方に正解も間違いもないことを一番伝えたかったのだと思う。岡嶋さんはこの本の中で、「もう後戻り出来ない状況に追い込んでしまうと、すぐ馬力は出るけれど、一歩間違えば相当厳しい目にも遭いかねない。」と語っている。結果として、岡嶋さんは作詞作曲家として成功し、音楽で生きていけるまでになったが、ここまで来られたのは中学時代に同じ学校の生徒達とは違う道を選び、一心に音楽に向き合おうと決心した結果だろう。夢へ近づくために人とは違う道を選んだとしても、必ず自分の夢に辿り着けるとは思わない。しかし、どの道でも自分が選んだ道で経験したことは無駄にはならないと思う。そして、これからの自分の人生において役に立つ時が来ると思う。そのように捉えれば、夢を叶えるまでの過程に意味を持って、自分の夢に前向きになれるのだろう。

私はこの本から新しく学んだことが多くある。その中でも特に印象に残っていることは、「好きを仕事にすることが全てじゃない」という言葉だ。私は今まで、好きなことを仕事にしたいと考えており、好きなことをすることでモチベーションも上がり、楽しく仕事が出来るとかと思っていた。だが、他に得意なことがあるのならば、それを仕事にして、好きなことを趣味として、仕事と趣味を並行して続けるという考え方もあることを新しく学んだ。

私はこの本を読んで、自分の将来に希望を持ち、前向きに考えられるようになった。タイトルにもあるとおり、夢の叶え方は一つではないことを日頃から自分に言い聞かせるようにしたい。自分に合う形で、夢の叶え方を見つけることは難しいと思う。けれども、夢が叶うまでの過程の中で、大変だったことや苦労したこともいつか役に立つ日が来ると思いながら日々の生活を大切にして、自分の夢を叶えたい。

図書名
著者名

夢の叶え方はひとつじゃない
岡嶋かな多

入 選

不良とクラシック音楽

貴田 雄介

佐伯一麦という作家のことを知ったのは仙台文学塾という作家を目指す人向けの講座の講師としてだったと思う。彼の講座を聞く前に三島由紀夫賞を受賞した「ア・ルース・ボーイ」を読んだ。彼が電気工をしていた頃の事を書いた私小説であり、主人公の青年は物語の中で付き合っていた彼女との間に子どもを持つ。丁度僕もその頃に妻との間に幼子を抱えていたから主人公の青年に共感しながら読み進めた。主人公の青年は家庭や本人の事情から高校を中退し、ひよんなことから電気工の仕事に就く。様々な現場で見習い工として場数を踏み、物語終盤に母校であり自分が卒業するはずだった高校の卒業式のリハーサルが行われる体育館に電気工として仕事に携わり立ち会うことになる。青年は周囲の教師や同級生達からルース・ボーイ、つまり不良少年と呼ばれ、彼自身そう呼ばれることに反発や反抗心を感じながら、心の一部では引け目を感じていて、不安に揺れる繊細な面も持っている。それが、社会の中で電気工としての役割を与えられ、母校の教師達も自分のことに気づかず、生徒としてでなく、電気工として見られ、応対されるという経験を通して、自分の人生やあり方に自信を掴み、ルース・ボーイの「ルース」という言葉が持つ別の意味である「自由な」という意味として肯定的に捉えて成長していくという物語で、爽やかで晴れやかな気持ちで本書を読み終えた。

僕は、大学時代に演劇に出会い、演劇に魅了され、就職活動をせずにそのまま小劇場制作としての仕事をスタートし、今で言うブラック企業のような働き方をしていた数年間の下積み時代を経て、現在も劇場での仕事に就いている。多くの同級生が通った就職活動という通過儀礼のようなものを経験せずにこれまでの人生を歩んできた僕はこれまで、ア・ルース・ボーイの青年と同様の引け目や自信の無さを抱いてきた。その僕の思いさえも肯定されるような気がして、本作を読んで僕は不良でありかつそれが自由さでもあるルース・ボーイの一人として励まされた。

劇場で働くようになり、演劇だけでなく音楽に関わる機会が増え、それまであまり聴くことがなかったクラシック音楽などもユーチューブやCDやレコードで聞くようになった。同僚にクラシックが大好きで自らも奏者として地元の楽団に所属している人や音楽大学卒の人達と話していると知識の多寡や経験値の差などを感じる。そして、暗黙の前提としてクラシック音楽／演劇のような価値観に触れ、またもや以前の自分に自信が持てないネガティブな感情が湧いてきて一人で落ち込んだりした。そして、クラシックについて勉強しようとしても元気が続かず何から手をつけて良いかわからない状態になっていた。古書店の棚にあった佐伯さんの「読むクラシック―音楽と私の風景」と出会い、僕は自分が小舟で海に漕ぎ出し嵐に難破して一人大海に投げ出され息も絶え絶え踋いているような心境だったので藁にもすがらる思いで佐伯さんの差し出した櫂を掴んだ。

「読むクラシック」では四十八曲のクラシックの名曲や小品が取り上げられている。曲の解説などにも触れられているがそれが全てではなく、佐伯さんが人生の中で触れて来たクラシック曲との思い出が綴られており、クラシック曲を手がかりにした半自伝的なエッセイである。中学時代の同級生の影響でレコードでクラシックを聴くようになり以来クラシックファンである佐伯さんの音楽遍歴が数々のエピソードを交えて語られる。それらもクラシックコンサートで聴いた曲目だけでなく、小学校の給食の時間にビゼーの「アルルの女」が流れていたとか、開店前の焼き鳥にモーツァルト クラリネット五重奏曲K581が流れていて、その曲が店の女将さんの思い出の曲だったので女将さんの過去の話を聞かせてもらい、そうした語らいから佐伯さん自身のその曲に纏わる別の思い出が語られるという話など、クラシック曲を入り口にして佐伯さんの物語が泉のように語られる。その調べは融通無碍に流れていくようで読者である僕はその流れに身を任せる魚の如く、川を下って行くような心地がした。佐伯さんが書いたように音楽をテーマにして自分のこれまでの人生を振り返ってみるのも悪くないと感じた。クラシック音楽と聞くとどうしても敷居の高さを感じてしまうけれど、音楽好きの佐伯さんのような人でなくとも、多くの人が身近な所でクラシック音楽との出会いがあり、その曲に纏わるエピソードの一つや二つを持っているだろう。僕

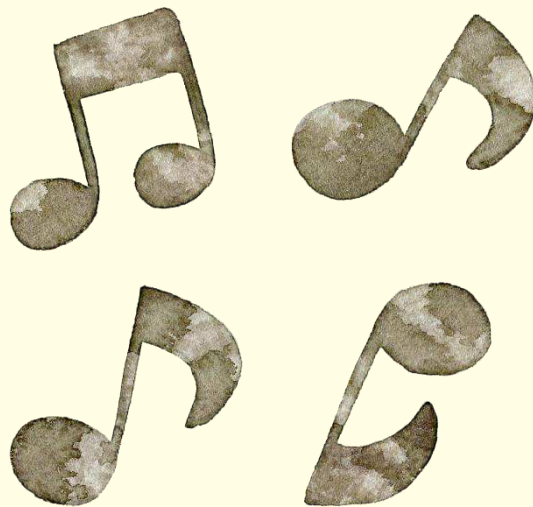
はまた、佐伯さんの言葉に触れて、クラシック音楽に対する身体の強張りのようなものを解してもらったことが出来た。そういう感触を掴むことが出来た本書をクラシック音楽が苦手という人達にぜひ手にとってもらいたいと思う。

図書名

「ア・ルース・ボーイ」

著者名

「読むクラシック―音楽と私の風景」
佐伯 一麦



入 選

「推し」という存在

紫波総合高等学校 3年 工藤 七海

あらゆる場所で「推し」という言葉をよく耳にする。日常生活での友人との会話でも自分の推しについて盛り上がるのがよくある。推しがいる私は今回、「推し、燃ゆ」という本が目に入り、気になって読んでみた。このタイトルを最初見た時は、推しに熱中することを「燃ゆ」と表現しているのだと思った。しかし、いざ読み始めるとすぐに別の表現だということが分かった。「燃ゆ」とは主人公の女子高生の推しが炎上するという意味であり、物語はそこから始まった。

主人公の女子高生であるあかりは学校でも家庭でもうまくいっておらず、彼女の唯一の生き甲斐が男性アイドルの推しであった。そのアイドルが物語の冒頭でファンを殴ったため炎上する。そんな推しに全てを捧げ続けるあかりが推しと決別するという、なんとも救いがない話だった。主人公の推し方は推しに対して危害を加えるようなことはなく、理性的で距離を保っているが、私生活は壊滅的でバイトをばったり学校を退学したりするなど、ただただ主人公のあかりの生きにくさを感じられ読んでいて辛くなった。私の推しは主に二次元の、言ってしまうえば人間に造られたキャラクターというものであり、何かの行動や発言で炎上することはないが、実際に存在しているアイドルや歌い手、俳優が炎上してしまった時、自分はどのようなのだろうと考えさせられた。主人公のあかりのように推しが生き甲斐という人は現実にもいると思う。SNS等で誰かの炎上した投稿には「信じていたのに」などの悲しんでいるコメントを見かけることもある。この世の中では推しに対する思いが異常に大きく、時に恐ろしく感じさせられる。そんな世の中で生きている私も推しがいる。「推しは自分にとってどんな存在だろう」と物語を読みながら考えもしていた。

物語の中にあかりの言葉で「推しを推すことがあたしの生活の中心で、絶対で、それだけは何をおいても明確だった。中心っていうか、背骨かな」というものがあつた。あかりと同じように推しがいる立場からして共感できる

言葉だった。推しを「背骨」という人間になくてはならないものに例えているところがとても印象に残る。多少、私とあかりの推しに対する熱量は異なるが、「それな！」と言いたくなる言葉であった。内容は重く、正直あまりスッキリしない物語だが、ハッピーエンドではない部分に現実味があり、自分が生きている世界線と重なることができた。最後のあたりで落ちに落ちてしまった主人公が綿棒を拾う場面で生きていく決意をしたように見えたところが、もしかしたら光的な要素だったのかもしれない。タイトルの「推し」は初見では誰もが名詞として読むだろう。しかし読み終えてからタイトルを読むと、「推し」が動詞であり、主人公が推して燃える、いや、燃え尽きたという考察ができた。主人公が立ち直り、これからどう生きていくかは書かれておらず物語が終わり、あとは私たち読者に続きを任せるような余韻があった。推しについても自分の生き方についても改めて深く考えさせられる物語だった。

話の題材は今時だったが、自分の生きづらさの全てを推しで支える危うさや生々しい重みと苦しさなど、一言では表せない感情が沢山あった内容だと感じた。生きている人間を自分の糧にすることはかなりの賭け事だと思った。急に死ぬかもしれないし、グループを引退するかもしれない。この物語のように炎上して破滅に向かっていくかもしれない。生きているからこそ永遠では無いけれど、だからこそ推しの言葉や行動にはパワーがあったり、きらめきがあるのだろう。私も自分の生活が崩れるほど推しにのめり込みたくはないと思いつつ、間違いなく心の支えになっているのも確かである。難しいけれど、自分の機嫌は他人に頼りすぎず、自分自身でもとれるようになりたいと思う。

図書名 推し、燃ゆ
著者名 宇佐見りん